

2025.8.24.

「神の言葉を語る方」

旧約 イザヤ書 4章 2～6節

新約 ヨハネによる福音書 3章 31～36節

1. はじめに

私どもはヨハネによる福音書から、毎週御言葉を受けています。聖書には福音書というものが四つありますけれど、その目的はみんな同じです。イエス・キリストというお方はどういう方なのか、イエス・キリストというお方は何者なのか、誰なのか、そのことを伝えようとして記されました。それはマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ四つ福音書どれも同じです。イエス様の言葉と為された業によって、そのことを伝えようとしています。しかし、その中でヨハネによる福音書は、ほかの三つの福音書に比べて、独特な表現、言い回し、象徴的な言葉を用いることによって、より直接的に、又より神学的に、より信仰的な深みをもって伝えようとしています。また、同じ言葉や同じことを繰り返し記すことによって、螺旋的にと申しますか、イエス様がどういうお方なのかということをも明確に伝えようとしています。他の三つの福音書と内容は同じです。しかし、その伝える言葉、表現が違う。独特です。

どうしてそのような表現をとっているのか、理由は本当は「神のみぞ知る」という所でしょうが、色々考えてみますに、ヨハネによる福音書は四つの福音書の中で一番最後に記されたことが、その大きな理由の一つだと考えられます。聖書学者によって違いますけれど、最低でも10年から20年はヨハネによる福音書は他の三つの福音書よりも書かれたのが遅いと考えられています。つまり、ヨハネによる福音書を記した人は、他の三つの福音書を知っていた。ですから、又同じようなものを記す意味はないと考えたのでしょう。また、このヨハネによる福音書が他の福音書より遅れた10年、20年の間に、キリスト教会の置かれている状況も大きく変わったということです。紀元後70年（この年はとても重要です）、ローマ帝国の軍勢によってエルサレムは陥落し、ユダヤは滅ぼされました。エルサレム神殿は瓦礫の山となり、ユダヤ人たちはこの時から祖国を持たない民となりました。そして、ユダヤ教はこの時を境に大きく変わりました。それまでは、ユダヤ教の中にはファリサイ派、サドカイ派、エッセネ派など幾つものグループがあり、キリスト教もその中の一つ「ナザレ派」と呼ばれておりました。しかし、このエルサレム陥落を境に、ユダヤ教はファリサイ派のラビ・ベン・ザッカイを中心としたラビ・ユダヤ教一本になります。そしてキリスト教はユダヤ人社会からはじかれることになりました。ユダヤ人キリスト者たちはユダヤ人社会にとどまってキリスト者であることを辞めるのか、キリスト者であり続けることによってユダヤ人社会から出て行く

か、厳しい選択を迫られました。そのような中で記されたのがこのヨハネによる福音書でした。ですから、ヨハネによる福音書はイエス・キリストというお方が神の御子であり、この方を信じることによって永遠の命を与えられるのだということを、より明確に告げる必要があったわけです。

2. 誰の言葉か？

さて、今朝与えられておりますヨハネによる福音書の3章 31 節以下の御言葉ですが、この言葉は誰の言葉なのか。27 節以下は洗礼者ヨハネの言葉ですが、私どもが現在用いております新共同訳ではそれは一応 30 節で終わって、31 節から 36 節は改めて「」でくくられています。こうなると、31 節以下は洗礼者ヨハネの言葉ではないかのように読めます。そうすると、誰の言葉なのか？ということになります。しかし、口語訳聖書では 30 節と 31 節の間に「」はありません。そうすると、27 節からの続きで洗礼者ヨハネによる言葉ということになります。さらに、一番新しい訳の聖書協会共同訳では 31 節から 36 節のところは、そもそも「」がありません。そうすると、これは誰かの言葉というよりも、この福音書を記した人による解説・説明ということになります。言葉にもなっていない「」があるか無いかなんて、どうでも良いと言われればその通りなんです。なぜなら、ギリシャ語本文には「」なんてありませんから、これは翻訳した人がどう理解したかということを示しているに過ぎないからです。ただこれが誰の言葉であったとしても、内容を見ますと、これは明らかに3章 16 節の「神は、その独り子ををお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである。」という有名な言葉を説明しています。

3. 上から来られる方：イエス・キリスト

31 節を見ますと「上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。」と記します。実にイエス様は「上から来られた方」であり、「地に属する者」ではない。そして、イエス様は「すべてのものの上におられる」と告げています。「上から」とは「天から」ということ、「神様のもとから」ということです。そして「地に属する者」ではないとは、天に属する者だということであり、それはただの人間ではないということであり、目に見える命だけで生きている者ではない、神の御子であるということです。さらに言えば、「地に属する者」ではないということは国とか、民族とか、人種とか、肌の色とか、そんなものによってイエス様は縛られるようなお方ではないということです。そして、イエス様は「すべてのものの上におられる」お方、つまり神様だということです。

ここで私どもは、クリスマスの出来事を思い起こします。イエス様は聖霊によって身籠もった乙女マリアからお生まれになった。これは、「人間というものは精子と卵子が結合して、細胞分裂が繰り返されて、赤ちゃんになって女性から生まれるのだ」と教えられてきた現代人には、とても信

じられないことでしょう。しかしそれは、イエス様というお方を私どもと同じ人間として考えるから、そんなことはあり得ない、とても受け入れられない、信じられないということになるわけです。しかし、聖書はイエス様は「地に属する者」ではないと言っているわけです。「上から来られた方」「すべてのものの上におられる」方だと告げているわけです。つまり、「イエス様はただの人間ではありません。神の御子です。神様です。」と告げているわけです。ですから、クリスマスは大切なんですね。サンタクロースが来るからクリスマスは大切だということではありません。

4. I 兄弟の諮問会で

もう30年ほど前になるでしょうか。関西にある私の最初の任地であった教会で、高校で数学の先生をしていた方が洗礼を受けました。この人は、中学・高校・大学とキリスト教の学校に通っていた人でした。中学・高校では毎週1時間聖書の時間があり、毎日礼拝があった。そういう所で育ったものですから、キリスト教に対しての違和感はないわけです。そして、良く聖書も知っている。しかし、とにかく理屈っぽい。数学先生をしているくらいですから、論理的に筋が通らないところは、「これはおかしい」と言うわけです。この人が結婚した奥さんはキリスト者でした。同じように中学・高校・大学とキリスト教の学校に通い、こちらは中学生の時から教会学校に通われて高校生の時に洗礼を受けていました。そして、転勤で私が遣わされた教会のある町に来られました。奥さんは毎週礼拝に来ます。ご主人は奥さんを車で送って来るのですが、礼拝が終わるまで車の中でラジオでクラシックを聴いて待っている。家に帰ると、奥さんは「今日は牧師先生はこんな話をされた。」と言うと、「それはおかしい。聖書にはこう書いてある。」と反論される。奥さんはどう答えればいいのか分からないので、「牧師先生教えてください。」と言ってくる。そんな生活が何年続いたでしょうか。3人の子が与えられ、みんな教会の幼稚園に来て、教会学校に来るようになる。いつしか、子供と一緒に教会学校に来られるようになり、洗礼を受けると言われた。その諮問会の時です。長老が「イエス様が乙女マリアから生まれたことを信じますか」と聞かれました。そのときの答えは「ハイ。イエス様は神様なんだから、そんなことは何の不思議もないでしょう。」というものでした。あれ、「それはおかしい」って言わないんだ、と思いました。神様はこのように神の言葉を通じるようにしてくださるんだと、改めて神様はすごいなと教えられました。それから、このご夫婦は教会学校の教師をやり、ご主人は長老になり、奥さんは奏楽者となりました。今は奥さんが長老をされています。

5. 分からない神の言葉

私どもは自分が知っていることしか話せません。知らないことは話しようがない。当たり前のことです。では、聞く方はどうでしょうか？実は、これも自分が知っていることしか聞くことができ

ない、聞いても理解できないし、受け入れられないという所があります。もちろん、知らなかったことを教えてもらったり、調べたりして知ることは嬉しいこと、ワクワクするような知的満足というものがあることを私どもは知っています。しかし、それは「全く知らなかったこと」ではなくて、すでに知っていたり、経験したりしていることの延長といいですか、それを前提としていることについてでしょう。自分が知っていることや経験していることとあまりにかけ離れていることは、それが正しいことだと言われてても、すぐに「なるほど」とはならず、「へー」とか「ふーん」とか「そんなもんですかね」という心の反応になるでしょう。聖書の話は、私どもが前提とし、当たり前としている物理法則とかを無視しているようなことがたくさん記されています。ですから、ちっとも分からない。「何じゃそれは」と思う。それは私どもが生きてくるなかで、全く意識したこともなく、聞いたこともなかった「天地を造られたただ独りの神様」を前提としているからです。ですから、初めて聖書を読んだとき、「なるほど」と納得する人はまずいません。私はそんな人には出会ったことがありません。何を言っているのかさっぱり分からない、それが正直な所でしょう。私もそうでした。今お話しした I さんも同じでした。では、一体そこで何が起きたのでしょうか。

6. 神の言葉が分かるという奇跡

それが「聖霊なる神様の御業」です。32 節「**この方は、見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。**」とあります。イエス様は上から来られた、つまり天から来られた方ですので、天の国において見たこと、聞いたことを証されるわけです。「見たこと、聞いたこと」と言いますと、何か天にはきれいなお花畑があって、というようなことをイメージしてしまうかもしれませんが、そういうことではありません。天におられる父なる神様の御心、神様の愛、神様の知恵、神様の真実、神様の力、神様の救いのご計画といったことです。イエス様はそれをお語りになるのですけれど、誰もそれを受け入れない、信じない。これはヨハネによる福音書 1 : 10、11. に記されていることと重なります。「**10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。 11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。**」「言」と言われているのが、1 : 1 で「**始めに言があった**」と告げられているキリストです。世はキリストによって造られたけれど、世はキリストを認めなかった。また、キリストは自分の民のところに来たけれど、民はキリストを受け入れなかったと記されているとおりです。そして、この世も民もイエス様を受け入れなかったが故に、イエス様は十字架にお架かりになられたわけです。しかし、受け入れる者もありました。イエス様の弟子たちがそうでしたし、弟子たちによってイエス様の言葉と業を告げられてキリスト者になった人たちもそうです。更に私どももそうです。不思議なことですが、私どもは神様が真実な方であることが分かった。イエス様が告げられたこと、弟子たちが告げたことが真実であると分かった。34 節で「**34 神がお遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が “**

霊”を限りなくお与えになるからである。」とありますが、神の言葉を話された「神がお遣わしになった方」とは、イエス様のことです。しかし、それだけではなくて、イエス様の弟子たち、代々の聖徒たち、そして私ども含まれていると読んで良いでしょう。みんな聖霊を神様から与えられて、神の言葉を語りましたし語っています。しかし、聖霊なる神様は神の言葉を語る者にだけ与えられるのでしょうか。もし語る者にだけ聖霊が与えられたとしても、聞く者に与えられなければ、神の言葉が神の言葉として聞き取られ、受け入れられ、話を通じるということは起きません。実に、イエス様が来られてからずっと神の言葉が語られ、それが神の言葉として聞き取られ、受け入れられ、信じる者が起こされるという出来事が起きています。これは当たり前のことではありません。聖霊なる神様による奇跡です。教会とは、この奇跡が起きているところです。

7. 御子を信じる人：神に従う人：永遠の命を得ている

では、イエス様の言葉を受け入れ、イエス様を神の独り子として信じた者はどうなるのか。聖書はここではっきり 36 節で「御子を信じる人は永遠の命を得ている」と告げています。これは 1:12 において「言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」と告げられていることと同じことです。イエス様を信じる者は神の子とされ、永遠の命を与えられる。これがイエス様の約束であり、聖書の約束です。「永遠の命を得るであろう」ではなく、「永遠の命を得ている」です。イエス様を信じる者は、既に永遠の命を得ている。確かに、代々の聖徒たちは肉体の死を免れることは出来ませんでしたし、私どももそうです。しかし、それで終わらない命に私どもは既に生きています。それはどこで分かるのでしょうか。それは難しいことではありません。イエス様がお語りなされたことを本当のことだと受け止めることが出来たならば、そしてそれに従って生きていきたいと願うのなら、それは既に私どもに聖霊が与えられている証拠ですし、永遠の命に生き始めている証拠です。なぜなら、天の国・神の国において完全な形で与えられる永遠の命とは、神様と私ども、イエス様と私どもの間に愛と信頼で結ばれる深く確かな命の交わりのことだからです。神様・イエス様を愛し、信頼しているなら、既に私どもは永遠の命に生きています。それは、私どもは元々「地に属する者」でしたけれど、「天に属する者」になり始めているということです。天に属する者は、地に属する者が求めるものとは異なるものを求めるからです。地に属するものに価値を見いださなくなるからです。この世の富や地位や栄誉よりも大切なものを求める。それは愛であり、誠実であり、平和であり神様が喜ばれるもの、それを求めるようになります。地上の富ではなく、天の富を求める者となります。仕えられる者としてではなく、仕える者として歩んでいきたいと願います。祈ることが、生活の中に根付いていきます。永遠の命が既に与えられているからです。その証拠は、他にいくらでもあります。

8. 神の怒りの下にあったけれど

最後に一つだけ確認して終わります。36 節の「御子を信じる人は永遠の命を得ている」の後です。「御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。」という御言葉をどう受け止めるかということです。ここを普通に読めば、「まだ神の言葉が分からない人、イエス様を信じることなく、それ故イエス様に従わない人、そういう人は永遠の命に与らないだけではなく、神様の怒り、神様の裁きを受ける。」そのように読むでしょう。それは、まだイエス様の言葉を神の言葉として聞いていない人にとって、とても恐ろしい裁きの宣告のように聞こえるのではないかと思います。もし、そのように聞こえたならば、神の怒りを買うことがないように信じる者になっていただいたら良いと思いますけれど、本当にここで大切なことは「この言葉は既にイエス様に従う者とされた者に告げられている」ということです。そうすると、この言葉は何を告げていることになるのでしょうか。既に信仰を与えられた者が、まだ信仰を与えられていない人に対して、上から目線で「信じないと永遠の命に与れないよ。滅んじゃうよ。神様の怒りを買って裁かれちゃうよ。」というように読むではありません。この「御子に従わない者」というのは、イエス様に救われる前の地に属する者であったときの自分です。死に支配され、自分の欲に引きずられ、何が正しいことなのかも分からず、神の怒りによって滅びるしかなかった自分です。それが今では、神様に向かって父よと呼び、イエス様を我が主と信じ、イエス様を愛し、イエス様に従う者としていただいた。永遠の命に与ることが出来た。何とありがたいことか。このように、この言葉は私どもを神様・イエス様に感謝する者へと導くものだということです。上から目線と神様を仰ぐ目線とでは、方向が正反対ですね。私どもは、自分の心の目線というものに気を配って、御国に向かってこの一週間も歩んでいきたいと願うものです。

お祈りします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝も神の言葉である聖書の言葉を通して、私どもにあなた様の御心を教えてくださいました。感謝します。私どもは、あなた様の愛を知らず、あなた様に感謝することもない、あなた様の怒りを買うしかない者でありました。しかし、あなた様は私どもに聖霊を与えてくださり、あなた様の恵みと真実を受け止めることを得させてくださり、信じない私どもを信じる者に造り変えてくださいました。その恵みの中に生かされております日々を心から感謝いたします。どうぞ、私どもの唇にいつも感謝と賛美と祈りを備えてくださり、健やかな御国への歩みを整えてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン